秋高同窓会だより

発行者
秋田県立秋田高等学校
同窓会
印刷所
秋田マイクロ写真印刷㈱

昭和55年度定期総会
8月17日 弥高会館で

役員補充
顧問は七名。小西氏に代り金子恭三氏副会長に！
百十周年記念事業実行委員会の設置承認される

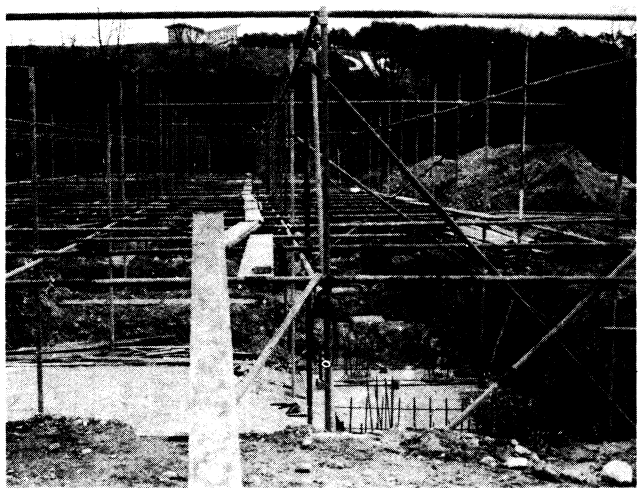
今年の総会は出席者九十名。花岡副会長が議長をつとめ、役員の補充案をはかった。顧問は小畑勇二郎、佐々木義武、蓼沼銀治郎の三氏であったが、前校長菊地俊一、山本一、小田島邦夫の三氏を加えて、更に、小西達四郎副会長が健康上の理由で辞表を提出したので顧問になってもらうことに決定した。なお、小西副会長の辞任により、新たに副会長として金子恭三氏（大12卒）を迎えることになった。

金子新副会長

また、秋高創立百十周年記念事業実行委員会の設置が承認され、昭和五十八年を目指して活動を始めることになった。

なお今回の総会には、大正七年卒の田中清吉氏（大阪）、石山皆男氏（東京）も出席、同期は会長をはじめ9名、大先輩の意気当たるべからず、後輩を圧倒した。「有朋自遠方来、不亦楽乎」

秋高 新棟建築
安全祈願祭を行う



「だより」第10号で「今年度中に北棟の北に新棟が建つ」とお知らせしたが、ちょうど建設場所がテニスコートにかかっているため新たに小体育館（講堂）の北、軟式野球場にテニスコートが造成され、生徒は練習している。

また、学校で新棟を理科棟にしたいと希望したためであろうか、新校舎の着工は10月17日に延びてしまった。岩盤が固くて、パイル打ちに難儀したようだが、順調に進んでいる。11月27日、校舎建築の安全祈願祭が、業者により現場で執り行われ、県関係、学校、同窓会など関係者が出席した。

現在の校舎は理科の特別教室をも普通教室に使用している状態なので、理科棟を新築することは、教育上、絶対に必要であることは言うまでもないことである。

普通教室よりは経費もかさみ、設計も特別なものになるわけだが学校の要望に応えてくださった当局に感謝しなければならない。

昨年7月19日設立された秋田県立秋田高等学校校舎改築期成同盟会は、名称のとおり、校舎の全面改築の実現を目的とするものである。

新棟の新築は、期成同盟会の直接の要望ではないが、教育環境を整備充実させるという点では、間接的に関係があり、期成同盟会としても歓迎すべきことであろう。

問題は新棟が完成してからである。来年度中には大体育館に手がつけられることになるそうだが、次々と現在の北棟、中棟、南棟の工事が始まるものと思われる。

県としては、継続事業としてではなく、毎年予算を計上して、一つずつ工事を進めてゆく方針だそうである。

全面改築か、全面補修かもまだ確定しない状態であるが、とにかく専門家の綜合的判断に従って改善されてゆくことを期待しよう。そして創立百十周年の昭和58年には理想的な教育環境で生徒たちを学ばせたいものである。

各面紹介
2面　百十周年実行委（広報）
3面　蓼沼前会長追悼
4面
5面
6面　年次・地区のつどい
7面　スポーツ展望その他
8面　随想

母校だより

校舎北側（旧テニスコート）に大型の建設機械・作業小屋が並らび、朝から「ガン・ガン」という音がする。校舎改築の今年度工事分のコンクリート・パイルの打込み作業が続く。野鳥が囀り、時折りキジも姿を見せていた手形の高台に今や建設現場の賑いがやって来た。しかしコンクリート・パイル打込み終了と共に「ガン・ガン」という騒音はなくなり、授業も平常状態にもどった。二学期以降の母校の動きは、まず九月六日、七日の二日間にわたる秋高祭から始まる。北側に新しい校舎が建築されるというのでその影響を心配したが今年は無事終了することが出来た。テーマは「気焔」悪天候にもかかわらず大いに気炎をあげた。この行事が終了すると三年生は、大学入試に専念せざるを得ない。九月二十二日には国立大学共通一次志願票を提出ということで、各自が志望大学を決定しなければならない。共通一次受験希望者現役四〇一名（在籍四五五名）浪人二〇〇名である。このような進学のためのスケジュールが決定している現在、高校三年生が、正月大会を目指して頑張る、ラグビー・サッカーの試合日程は、最初から共通一次の試験は無理のようである。十月四日の太平登山は快晴に恵まれ大成功であった。実は、春の運動会・秋の秋高祭と、行事があると雨にたたられ、関係者をやきもきさせてきた。隔年実施の昨年もこの登山は雨のため中止になっている。このため三年生は最初にして最後。一・二年は秋高生として最初の太平登山ということで大いに青春を謳歌し、大自然の息吹に親しんだ。今年も山岳部OB諸氏の絶大なるご協力があったことを感謝する次第である。中旬の中間考査の成績がまとまった下旬から、十日間のPTA面接旬間が始ったが、此の期間中まれに見る悪天候のため、父母・教師、ともども暖房のない校舎で寒さに耐えながら生徒の将来について熱心に話合った。出席率は九二%以上もあった。寒さに関連したエピソードとしては、九月二十九日の全国高校サッカー県予選大会決勝（秋田高0－2西目農業高校）の全校応援の当日は秋晴れのまことに応援日和であったが、十月二十七日、全国高校ラグビー県大会決勝（秋田高4－18秋田工業高）の全校応援は、戦争中の耐寒訓練を偲ばせるものがあった。数日来の雨、冷たい西風が八橋ラグビー場を吹きぬけ、選手はドロンコのため相手チームの区別もつかない有様。応援席は、雨と風のため、びしょぬれで寒さにふるえあがった。今年のラグビー部は三年生全員が浪人覚悟で頑張ったが、遂に正月大会に出場できなかった。

十一月二十二日、二年生は恒例の関西修学旅行に出発、古都・奈良・京都を訪れる。今年は五クラスずつの二班編成である。

最後に今年度後半の文化部、運動部の活動状況をご報告する。先ず文化部ではブラスバンド部が東北大会で銀賞を獲得、放送部は朗読部門で全国大会に出場した。演劇部も久々の中央地区コンクールで優勝、全県選抜大会では初の優勝、来年二月東北大会に出場する。来年は高校文化祭全国大会が秋田県で開催されるので外の文化部も大変張切っている。

運動部については、硬式野球部は夏の大会・準決勝、秋季全県選抜大会決勝において惜敗。弓道部は全県新人戦、団体優勝、個人戦でも一位を獲得。ボート部は国体県予戦優勝。剣道二名・柔道二名・ラグビー六名が夫々オール秋田選抜チームの一員として国体出場、大活躍している。運動部の戦績は勝率で計算すれば恐らく県内高校のトップクラスであろう。来年こそは「優勝」の栄冠をぜひ勝ちとりたいものである。諸先輩のご声援を深く感謝する。十一月二十六日（昭和二〇年卒　山谷浩二）

恩師ご健在
原正朝先生（昭16～昭19）

原先生の来秋を迎えて、昭和21年卒の有志が盛大な宴を張ったと聞いたので、奥様のご実家、荻津家の法事の終った千秋会館にお邪魔してお話を伺った。

原先生は大正2年1月26日のお生れだから満67歳。頭こそは真白になられたが、お顔も艶やかで福々しく、ご壮健そのもの。ゴンボの時代は遠く去って、今やまさに円熟の境地におられる。

先生は、お田植え祭で有名な奈良県磯城郡田原本町八尾八一六の鏡作坐天照御魂神社の宮司様でいらっしゃる。

二人のお嬢さんは嫁がれ、ご長男はお医者さん（整形外科）である。先生は、秋田美人で明朗快活な奥様とゆったりとお暮らしになっているご様子である。

昔、先生のお部屋に、参上したことが何回かある。洗濯物のオシメのひるがえる下、うず高く積まれた古典にかこまれて、先生は書をひもとくか、あるいは筆を揮って書道にいそしんでおられた。

私事にわたるが、私に召集が来たとき、先生は歌を下さった。

○体弱き君もいくさに召さるると
今日を来て告ぐ顔晴れやかに

忘れることの出来ないありがたい歌である。

「先生、今はどんなことなさっていますか。」先生はニヤリと笑って、朝日カルチャーの雑誌「らうんじ」を見せてくれた。

なんと、その中に、「フランス語と私」という先生のエッセイが載っているのである。

先生は六十の手習いと称して、NHKのラジオとテレビの講座でフランス語を学び、奥様とご一緒にヨーロッパの旅をなさった。

昨年から朝日カルチャーのフランス語講座のレベルIIを受講、今年の四月からは講読の講座を受けて、カルメンの講義を聞いておられるという。

先生は、「年を取ってから教わることは本当に楽しい。特にフランス語は新鮮で奥深く、尽きぬ味わいがある。」とおっしゃる。まことにすばらしいことである。先生の若々しさの秘密はここにあるのだと思う。先生のますますのご健勝をはるかに祈るものである。

奈良から墨の色も匂うようなさわやかなおたよりをいただいた。中に一首の歌があった。

○ゴンボ、ヤキボンあだ名ありしを今日知りぬ三十余年後子等に招かれて

（一関　記）

事務局報

昭和五十五年六月以降の会務を報告いたします。

55・6・26　秋高同窓会だより第10号発行
6・27　東京支部総会
7・2　仁別学校林下刈り
7・17　大曲支部総会
7・15　会長、副会長会議
7・25　編集委員会
7・26　昭20(5)卒同期会
8・9　若菜会（女子）総会
8・17　昭和55年度定期総会
8・23　仙台支部総会
9・27　昭25卒同期会
10・2　幹事会
10・18　能代・山本支部総会
10・18　男鹿支部総会
10・25　東京80期会、S29総会
10・31　百十周年実行委員会
11・7　札幌支部総会
11・8　蓼沼前会長葬儀
11・8　近畿支部総会
11・11　編集委員会
11・22　本荘支部総会
11・22　昭20(4)卒同期会
11・28　百十周年施設委員会

支部活動や各事業は活発に行われ、昭和58年の創立百十周年に向けて同窓会も動き出しているので支部、年次等で、できるだけ会員の消息を確認くださるようお願いします。

天上天下

▼秋田高校の硬式野球部が甲子園出場から遠ざかって今年で七年になる。大正四年第一回大会で初出場して以来六十六年、十四回出場の記録は秋田県では最多出場回数であるが、このところ宿敵秋田商業に肉迫されている。

▼今年の夏の甲子園大会の話題の一つは東京代表で進学校の国立高校が初出場した事であった。「さわやか」とか「クリーン」とか寄せられた賛辞は様々であったが、最大の関心は有数の進学校が勉強とスポーツの両立を果し得たという事であった。そうした進学校の出場が話題になる程、いまや普通科進学校の甲子園出場は難しい。

▼今年から弁天球場（八郎潟）で一、二回戦を行い、二回戦で横手高校と対戦した折に、右翼の観覧席に「文武両道いまだ健在なり」という横断幕がはられた。その応援の甲斐あって横手を三対零で降し、準決勝まで駒を進めたが豪腕高山を擁する秋田商業に三対零とやぶれ、ついに甲子園の道をとざされた。

▼東北六県それぞれの県を代表すると思われる進学校の今夏の予選成績は準決勝進出が秋田と磐城準々決勝に盛岡一高、三回戦進出は山形東、福島、二回戦、青森、弘前の両校、一回戦敗退が仙台一、二高という結果である。

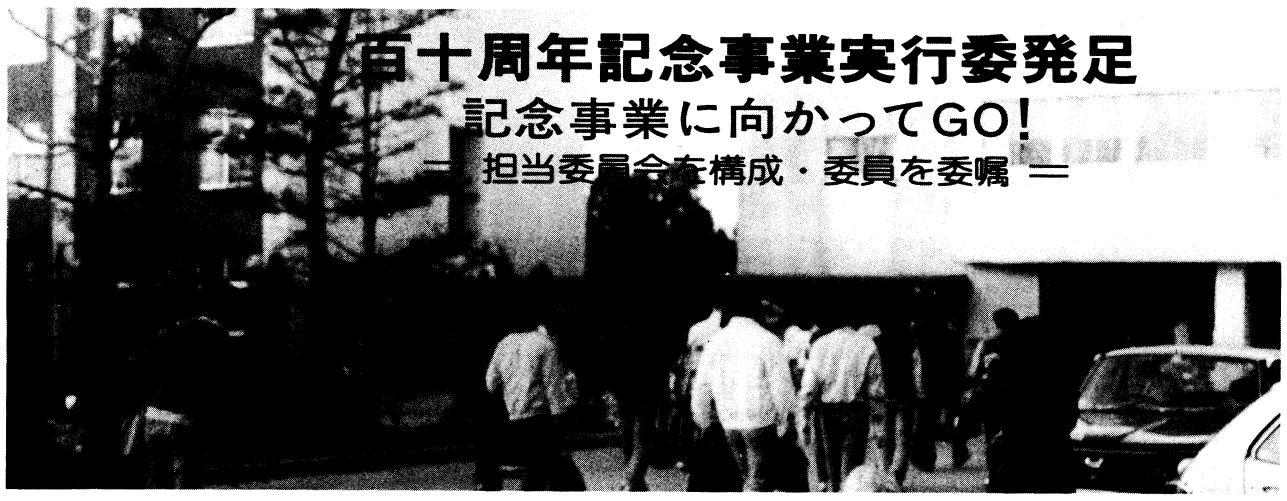
今年百周年を迎えた盛岡一高（旧制盛岡中学）の招待で、五月に仙台一高、盛岡一高、秋田高の三校対抗戦で秋田高が両校を破り優勝し白堊杯を獲得した。進学校同志まけられない対抗であった。

▼しかし甲子園への道は遠い。春、全県優勝、夏、準決勝、来春の選抜出場をかけた秋は、東北で優勝した経大附高と決勝で延長戦の末敗退した。今一歩である。

練習量も決して他の学校にひけをとらない。合宿すれば、朝六時半から八時まで、午後は四時から八時半の夕食まで、夕食後、小さな照明をたよりに十時過まで。

来年こそ！選手は雪の降りしきる中を黙々とロードワークを続けている。

輝かしい記念事業
90周年・100周年



百十周年記念事業実行委発足
記念事業に向かってGO!
― 担当委員会を構成・委員を委嘱 ―

創立百十周年記念事業委員会の第一回委員会（略称・実行委）は十月三十一日午後五時から秋田駅前鎌田会館三階会議室で開催。同窓会幹事会で審議した基本構想を受けて、三年後の五十八年九月一日（予定）に挙行される百十周年記念式典日を中心に、有意義にして多彩な記念事業と記念行事を行うこととし、会則（要綱）、事業内容、部門別担当委員会構成などを満場一致で決定、百十周年の記念事業に向けて力強く発足した。

同日の会合には、小玉同窓会長以下大嶋、花岡副会長、学校側から秋山校長以下教職員、事務局担当者らのほか、各部門別の実行委員予定者ら五十余名が出席。

まず会則要綱として、会長には同窓会長、副会長には同窓会副会長らが当たること、会長が実行委員を委嘱すること、また分担事業毎に委員会を置くこととし、同窓会理事会、総会と密接に連絡、承認を受けて進めていくこと、各種事業は記念式典日を中心に行うことなどを決定、事業内容の骨子についてきたんのない意見を交換しあい、部門別委員を次のとおり委嘱した。

〈事業内容〉

事業内容としては次の八事業を行う。①恒久施設　②祝賀会　③追悼会（記念式典の前日）　④各種スポーツ大会　⑤校史編さん（百周年後の十年分）　⑥名簿編さん（百周年後の追加分）　⑦広報発行　⑧財政（記念事業のための募金）

〈部門別委員会〉

記念事業遂行のため次の七委員会を設置することとし、各委員を委嘱した。なお各委員会の活動内容については総務委員会で調整決定するとともに、十一月下旬以降各委員会を順次開催、具体的策定に入ることとした。

〈記念式典・祝賀会〉

記念式典は学校当局で行うが、祝賀会は同窓会が主催、協力することとした。

〈部門別委員会〉

総務委員　小玉孝次郎、金子恭三、花岡泰雲、大嶋民治、辻兵吉、小西達四郎、今村久吉郎、松本源太良、内藤庸男、荻原鱗次郎、道田重雄、杉渕一雄、畠山一郎、沢石謙、渡辺誠一郎、秋山光雄（校長）、山下三喜男（教頭）、菅原秀夫（事務長）

校史委員　道田重雄、花岡泰順、中山健、大槻家静、植村久美、一関吉美、田口能祐、竹内一朔、根布谷豪（事務局）

名簿委員　大嶋民治、京野大三、菊地茂、佐野謙一郎、長野佳司、今田猛、川井忠明、杉田宏、石塚功、大久保正樹（事務局）

行事委員　花岡泰雲、和賀政男、伊藤博次、小玉順一郎、藤田幸雄、大里祐一、平沢健治、神田勉、伊東俊穂、大友正勝、桝田浩司（事務局）

財政委員　畠山一郎、小国敬二郎、中野金之助、村上十郎、千田達彦、高橋昌一、大島三代助、佐藤国夫、大久保正樹（事務局）

広報委員　沢石謙、池田潤一郎、湊貞造、辻悌五郎、新林誠、工藤雄一、山谷浩二、近藤貢太郎、長尾景義、根布谷豪（事務局）

施設委員　杉渕一雄、桜谷吾朗、石川健一、東海林広司、広島吾朗、斎藤広孝、小林誠悦、桝田浩司（事務局）

記念式典・祝賀会は
昭和58年9月1日に

声

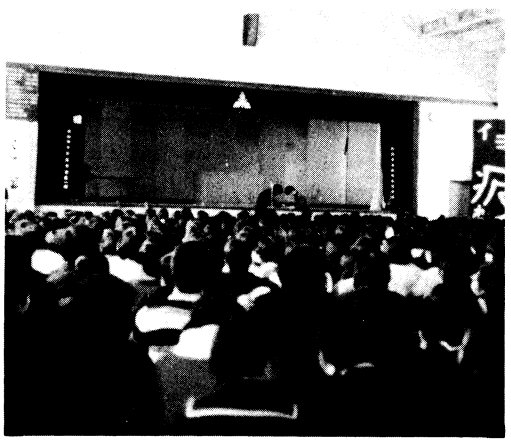
○第一回実行委で、学校側から出された記念事業への要望は、図書館の新設拡充、屋内野球練習場（甲子園制覇を目指して）、グラウンドの整備拡充、テニスコートや弓道場の新設整備、柔道場の拡張などさまざま。

○実行委側からの要望も多彩であった。そのひとつとして、校友岳人から成る「エベレスト登山隊」を編成し、百十周年の昭和五十八年に、頂上に校旗と目の丸を打ち樹てようとする壮大な声も。結局ガヤガヤの結論としては、県当局が当然施設しなければならないものを除いて、学校当局、生徒の意向などを充分に聞いたうえで、実行委で慎重に練りあげていこうということに落ちついた。

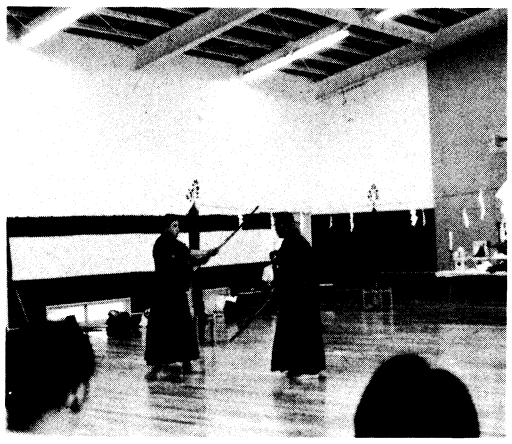
○さて生徒諸君は何を望んでいるか。五十五年度生徒会長、佐々木毅君（三年F組）＝写真＝は次のように卒直な声を述べている。

役員会で話し合ったが結論は出なかったので、次年度会長のもとで充分検討して欲しいと思う。話し合いの中でのぼった候補は①校舎の前庭に噴水広場を作って憩いの場としたい②図書館を新設し図書も充実して欲しい③運動場のトラックを全天候型に、フィールドも芝にしてサッカーを年中やれるように④セミナーハウスについては食堂を拡張して欲しいし、合宿利用も運動部に片寄らず文化サークルにも⑤散在しているクラブの統合会館がほしい……。

90周年　小体育館



九十周年記念事業で建設した小体育館は総工費二四八一万円で八五四㎡の暖房付き。同窓会の記念事業費九六七万円に県費一五一三万円の補助を加えて完成。入学式、卒業式、学年集会、文化祭などの諸行事に利用されている。（写真は文化祭風景）



100周年　研修会館　格技場

▼研修会館＝写真上＝（セミナーハウス）は百周年記念事業の主力事業。総工費四八一九万円。うち同窓会拠出が一九六六万円、PTA賛助寄付二二〇〇万円、残りが県費補助。三階建て総面積一〇〇五平方メートル。

一階が食堂、厨房、浴室など。二階は二段ベッドの宿泊室で九十余名泊れる。運動部の合宿、クラブ活動の研修に利用され、三階の第一研修室は視聴覚教室を兼ね、第二研修室は和室で会議その他の集会に利用されている。（写真は一階の食堂風景）

▼格技場＝写真下＝は大体育館が狭いため、剣道場を主目的として建設されたもの。総工費二三八二万円で総面積五二三㎡。PTAが主力となって七六二万円、同窓会からは三〇〇万円、残りを県費補助で完成。（写真は剣道練習風景）

内科・胃腸科・レントゲン科
笹原内科医院（入院応需）
院長　笹原秀雄（S23卒）
秋田市大町三丁目四番四十一号
TEL〇一八八―六二―二五七五

雪国の菓詩
りんご餅
めろへんかまくら
香人丈餅
巻蒸せんべい
秋田銘菓処　勝月
片谷信一（S31卒）
本店／秋田市保戸野通町☎(23)1671
売店／木内食料品売場・秋田空港売店
ステーションデパート売店1F2F

銘酒　出羽の富士
社長　佐藤久一（T15卒）
秋田県由利郡矢島町七日町

矢島町教育委員長
須貝作郎（S11卒）
秋田県由利郡矢島町田中町九七

株式会社　佐藤製材所
代表取締役　佐藤久弥（S30卒）
秋田県由利郡矢島町七日町二六
TEL〇一八四五―六―二〇一一

コンノ楽器
代表取締役　今野善治（S25卒）
秋田県本荘市裏尾崎町二三
TEL〇一八四二―二―二四八九

有限会社　今野薬局
今野鍠司（S32卒）
秋田県本荘市花畑町八七ノ二
TEL〇一八四二―二―四一八一

佐藤久夫（S8卒）
秋田県由利郡矢島町矢島町一番地

鳥海町教育長
三森美直（S15卒）
由利郡鳥海町下川内字大谷地十二

堀写真館
秋田県営業写真家協会会長
堀稔（S10卒）
秋田県本荘市谷地町二一〇
TEL〇一八四二―一―一五六〇

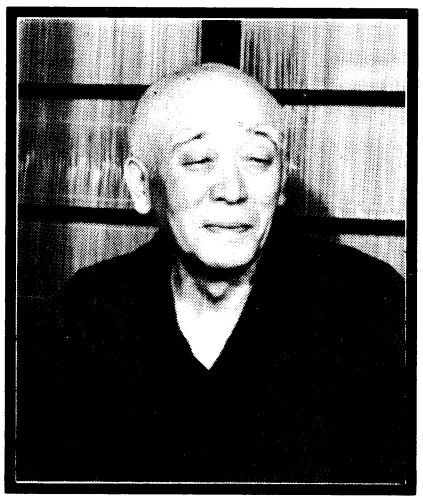
歯科　藤丸医院
藤丸隆樹（S32卒）
秋田県本荘市美倉町十六の一
TEL〇一八四二―一―五〇二三

株式会社　斎弥酒造店
斎藤銑四郎（S32卒）
秋田県本荘市石脇五三
TEL〇一八四二―二―〇五三六

田沢湖サン・アイビル（建設中）
角館サン・アイビル　大曲サン・アイビル
本荘サン・アイビル　横手サン・アイビル
ビル管理・貸ビル
有限会社　サンアイ
代表取締役　秋山秀昭（S39卒）
本社　秋田市中通3丁目4番47号チサン401号
〒010　電話0188（32）2211（代）

蓼沼銀治郎前会長を憶う

懐かしい豪快洒脱な人柄



小玉孝次郎（T7卒）

私は大正三年、蓼さんは大正三年、秋田市の中通小学校を卒業しました。学校は今のチサンマンションの場所でした。

父君は若くして亡くなられたので、蓼さんは祖父の銀治郎さんの薫陶を受けて育った方です。

蓼さんの当時の名前は「栄治」でした。長じて、祖父の「銀治郎」を襲名されたのです。

秋中の入学試験を受けるとき、祖父が「アンチャ、おめえ中学校出来れば東京さ連れて行く」と約束したそうです。合格したので東京に連れて行った祖父が、三越本店で「アンチャ、おめえ好きなもの買ってやる」と言ったら、蓼さん「おじいさん、このライオン二匹買ってけれ」と言い出した。もちろん三越玄関のライオンです。

そこで祖父は、売り物でないことはわかっているが、蓼さんを納得させるためにわざわざ支配人を呼んで、三越の大事な看板であると説明してもらったということです。さすがにおじいさんも偉かったと思いますし、蓼さんの蓼さんらしいきざしは幼少の時からあったんだなあと感銘しました。

中学校では特待生で通した秀才でした。秋中同窓会創立当時はし人の常任理事の一人として活躍されましたが、いろいろと「蓼沼語録」としてまとめてみたいような豪快で洒脱な言行で数多くの話題をまいた方でした。

秋田トヨペット株式会社の創立は、秋田駅のホームでの私との立ち話から始まったものですが、頭の回転がよいので、早速決まりました。現在の本社の敷地一万坪を買い求めたときのあざやかな手腕には本当に敬服したものです。

蓼さんはいつでも私の心の中に生き生きと蘇ってきます。

大正八年秋田中卒クラス・メイト　佐藤幸助

蓼さんとの出合いは小学校六年の時、蓼さんは中通小、私が女師附属小で、両校の野球試合が楢山第二球場での試合で始まっている。蓼さんは投手でユニフォームの上衣は原色の青色だった。翌大正三年、共に秋田中学に入学したのであるが、家もすぐ近くだったし趣味も同じという事で其の後長くおつき合いを願って今日に至っている。但し秋中在学中彼は学業優秀で常にクラスの級長を勤め、学校職員を始めクラス一同の信望も大きく、その頃既に将来の大物といった風格を持っておられた事は確かである。御尊父を中学在学中に失い、卒業と同時に祖父銀治郎様御尊母の御薫陶の下で家業を継ぐ事になったのであるが、好きな道とて仕事の合い間殆んど毎日の様に楢山球場に通っては母校野球部の指導に当り、大正十一年及び大正十三年の秋田中学の全国中等学校優勝野球大会（甲子園）出場に大きく貢献されたのである。特に秋中の黄金時代といわれた昭和六年より九年迄四年間、連続東北制覇、甲子園出場の折には当時野球部長古村精一郎先生と共に大阪に赴き佐々木義久様（義武代議士長兄）等県人同行者と猛烈な応援戦を展開、浪速っ子達の度胆を抜き昭和九年の夏には四強に残り惜しくも呉港中に敗れて準優勝を逸したものの蓼さんの一番油の乗り切った時代だったと考えている。（当時筆者同行）

昭和三年夏、岡忠精先生同窓会長当時の役員改選で先代辻兵吉氏、佐野亀太郎氏、小泉四郎氏、片屋豊治氏（以上故人）、小玉孝次郎氏（現会長）、蓼沼銀治郎氏と小生の七人が常任理事、理事長古村精一郎先生で会務の運営に当ったのであるが、気の合った同志のこと、しばしば会合後、当時華やかだった市内川反又は土崎料亭での夜を徹しての痛飲・談論交換なぞは、特になつかしく思い出されるのである。

戦争に突入、戦後二十三年学制改革で旧制秋田中学が秋田高校となり、古村同窓会長歿後推されて会長となられ、先年辞任されたのである。戦後、県・市の経済界に大きく足跡を残して世を去られたのであるが、蓼沼様の多くの人々を引きつけられるそのお人柄、闊達な識見は永く忘れられる事はあるまい。

先日お宅を訪ね、奥様と在りし日を偲び、若い日の事共語って帰ったのであるが、今は唯ひたすら心より御冥福をお祈りする許りであります。

本当に長い間数々お世話になりました。

以上

偲　蓼沼銀治郎氏

渡辺　不二男（大8卒）

小室先生に兵式體操をそはりぬ思へば懐し麻のゲートル
月の夜を校庭に木馬飛びをせりその友等みな今は世に亡し
日露役果溝臺記念日に雪の降る御所野に行軍しにき
そのみ子の臨終に萬歳を唱へさせし大山先生を思ふ国語習ひき
一箱が十錢のキャラメル友と分ち雄物川遡りきボート部員われ等

新林誠（昭28卒）

独特の風貌で床の間を背にして座り、誰にもまねの出来ない笑顔で盃を手にしておられるお姿は、とにかく最高でした。どんな素晴らしい芸術家にも表現することの出来ない雰囲気をおもちの方でした。深みのある声も独特でした。

文武両道、豪放磊落、質実剛健…花柳界に通じ、酒を愛し、ユーモアに富むその話術は定評がありました。そしてレコード収集、宝塚歌劇団の大ファンで甲子園に高校野球を観戦に行く度毎に寄っておられたとのこと…色々の面をおもちでただただ驚くばかりです。

当校の同窓会長の外に「さきがけ友の会」、「秋田銀行本店七日会」等その他多くの会の会長をなさっておられましたが、宴席での挨拶の上手なことは評判でした。お膳を前にしたお酒のみの気持をくみ、簡潔で且つその会の為に話すべきことはきちんと述べておられました。とにかく憎らしいくらい〝つぼ〟を心得ておられる方でした。

次に私事になりますが祖父の葬儀昭和35年の時、何から何まで本当にご親切にお世話頂きました。その葬儀の時の弔辞が今だに語り草になっております。その一部分ですが…「毎日晩酌と寝酒合せて、一升ちかくのみ、又たばこもかなり多く吸っていましたが、その量から判断して、間接税の大口納税者として表彰を受けなかったのはおかしいと思う。」

あちこちで笑い声が聞えるというほほえましいムードをつくって下さった弔辞でした。これも蓼沼さんだから出来たことではないかと思っております。

その後お世話になったことがご縁で秋田トヨペット㈱へ勤めさせて頂き、ご子息の現社長にも大変お世話になりました。

当時蓼沼銀治郎社長から教えて頂いた事の中で今でも頭にこびりついているのは、ミス（失敗）についての事でした。

その第一は「お客様に対して仕事の上でミスをしたら電話や手紙でお詫びをしてはいけない、体でも悪くない限りは直接お会いして心からお詫びをしなさい。そして事後処理に誠意を尽くしなさい。」と言うこと。第二は「真面目に熱心に仕事をした結果のミスと怠けたり手をぬいたりした結果でのミスを区別しなさい。全然違い、問題にならないんだぞ、失敗の質が違うんだ。」と教えて下さいました。

私にとって大先輩と言うだけでなくありがたい恩人と言った方が正確だと思います。

本当にお世話になりました…。今頃は祖父と一緒に芸者さんの話しでもしながら一献かたむけているかもしれません。

のみすぎないようにして下さい。心からご冥福をお祈り致します。

弔辞

秋田高等学校同窓会を代表し、慎んで故蓼沼銀治郎前会長の御霊にお別れの言葉を捧げます。

去る十月三十日朝の九時半頃、秋田トヨペット会社の三浦専務が訪ねて来られ、はじめて貴方の入院されたことを知らされました。あまり大袈裟に伝えられることをさけるためか、一応面会謝絶にしているとのことでしたので、何れ小康を得られたらお見舞しようということで別れたのであります。

ところが、その日の午後三時三十八分、亡くなられたとのお知らせを受け、あまりにも急なことで、唯々胸がいたむばかりでありました。

顧みれば大正十五年、秋田中学校同窓会創立の折、大先輩の岡忠精先生が会長、古村精一郎先生が学校側からの理事として、又秋田市在住の同窓生から貴方を含めた七人が常任理事として発足したのであります。

以来、貴方は今日まで役員として五十有余年に亘り、同窓会に尽くされましたご功績は計り知れないものがあります。

貴方は、昭和二十九年、故古村精一郎先生が会長に就任と同時に副会長になられ、古村先生が亡くなられた後は会長代行として我が秋田高校にとっては、世紀の大事業ともいうべき創立百周年の記念行事を陣頭指揮を以て有終の美を飾られたのであります。そして昭和四十八年に会長に就任、二期四年を勤められ、五十三年辞任と同時に顧問にご就任になられたのであります。

考えてみると、貴方のように我が同窓会に深くかかわり、仕事の半分は同窓会といった人は滅多にない存在でした。その性格や言動は古い時代の秋田中学の気風を今に生かした日常で、時には天衣無縫とみえる言辞も却って喝采を以て迎えられるという人徳のある方でした。

学校とのかかわりの深いことに野球のことがあります。今や甲子園での高校野球大会は日本スポーツ界の最大行事であり、その大会への出場は、聊か大袈裟にいえば校運を賭けるという大事であると思いますが、秋田県一の進学校である母校が、その常連であるという過去の歴史は、野球部後援会長、矢留倶楽部の会長としての蓼沼さん、貴方に負うところ絶大であります。

近頃あまり出歩かないでいらっしゃるようなので気にはなっておりましたが、併し好きなお酒は絶やさぬとも聞いておりましたし、まさかこんなに早くお別れすることになろうとは夢にも思いませんでした。

蓼沼さん、我々同窓会員は常にあなたの面影を偲びながら、会員の結束をはかり、母校の発展に寄与する決心を新たにいたしました。何卒彼岸からご照覧下さい。

心からご冥福をお祈り申し上げお別れのことばと致します。

昭和五十五年十一月八日

秋田県立秋田高等学校
同窓会長　小玉孝次郎

本醸造
太平山
姉妹品・ヤマキウ味噌・醤油
醸造元　小玉合名会社

株式会社 池田工務店
代表取締役
池田寛治（S38卒）
秋田県本荘市肴町五〇
TEL〇一八四二―二二―〇四六四
〇四七七

長田建設株式会社
取締役副社長
長田憲一（S42卒）
秋田県本荘市石脇字田頭二〇八の二
TEL〇一八四二―二―〇七二二(代)

㈲マルイチしょうゆそ醸造元
代表取締役
斎藤久一郎（S36卒）
秋田県本荘市石脇字石脇一一
TEL〇一八四二―二―〇〇六

株式会社 小西
社長　小西松治郎（T13卒）
専務　小西玄太郎（S27卒）
秋田県仙北郡六郷町六郷字馬町四一
TEL〇一八七八―四―一四〇〇(代)

湯川呉服店
湯川岩蔵（S20卒）
秋田県仙北郡六郷町
TEL〇一八七八―四―〇五〇五

高野歯科医院
高野桂悦（S40卒）
秋田県本荘市表尾崎町一九の三
TEL〇一八四二―三―〇六四八

斎藤写真材料店
斎藤隆（S42卒）
秋田県本荘市駅前通り
TEL〇一八四二―二―五五六五

有限会社 丸喜
社長
江幡喜一郎（S32卒）
秋田県本荘市上横町三八
TEL〇一八四二―二―〇一〇〇

内科・小児科
千畑村国保畑屋診療所
所長
碓氷昌（S17卒）
秋田県仙北郡千畑村畑屋字街道東三六
TEL〇一八七八―四―一二八三

富永歯科医院
富永功樹（S40卒）
秋田県仙北郡六郷町荒町一一七

神田医院
神田茂（S9卒）
南秋田郡飯田川町下虻川
TEL〇一八八七七―二〇〇四

菅原酒造店
清酒 天洋
菅原豊（S26卒）
南秋田郡昭和町大久保
TEL〇一八八七七―二〇一一

つどい

昭和五十五年度 東京支部総会

○とき　55・6・27
○ところ　池袋東武・バンケットホール

金谷支部長から挨拶と総会開催までの経過報告がなされた。特に本年は昨年よりも多数の出席があり喜びと感謝に堪えない旨挨拶された。加賀谷監事から監査報告がなされ、原案通り承認された。又支部長より会費の集まりも良好であり本年も同窓会だより編集費の一部として二十万円拠出することが発表された。次に小玉会長より東京支部からの物心両面に亘るご厚志に感謝する旨挨拶があった。秋山校長からは今年は進学状況・運動部の戦績が好調であり、数年後には新校舎を完成させたい旨述べられた。出席者中最古参の大沼氏(T5)の乾盃の音頭で懇親会に入る。テーブルスピーチに花岡・大嶋・両副会長から挨拶・お互に久闊を叙し憶出話に花を咲かしているところへ、佐々木義武氏がサミットから帰国、内閣首班問題等で寸暇ない折出席され、秋中野球部の歌を元気で歌われ終って先輩伊藤勝三氏(慶応の捕手)と握手された姿は温情ある胸を打つ情景を味わしてくれた。現職大臣の突然の出現にデパート側では大変な心労の様子であった。二時間余つきない話合いの後土井氏の発声で万歳を繰返し、近年にない楽しい雰囲気に浸ることが出来た。最後に東京支部よりの本部への要望として、今後本部総会等の日程を早く決定し同窓会だよりにのせるようにしてもらいたい。

◆出席者
来賓　秋山光雄校長、小玉孝次郎会長、花岡奈雲、大嶋民治副会長、桝田浩司事務局員。
会員　大沼滉(T5)石山菅男(T7)平山寅次郎、土井栄治(T9)茂又弘三、大貫和一(T10)田村忠、冨永五郎(T11)佐宗金太郎(T12)水沢久三郎、高橋平八郎、吉成一郎、早川寛斉(T13)伊藤勝三、木村三郎(T14)加賀谷篤一郎宇佐見盛志、金谷勇(T15)関俊男木村元治、木田篤孝、佐々木義武(S2)小泉格朗(S4)松野二郎桜田亮直、斎藤善次郎(S5)大山正、谷藤正三(S6)樫尾報三、浦川直樹、戸田百年(S7)大津英男(S8)佐藤博(S9)川村英一、菊地哲二郎(S10)青崎不二太郎、今行雄、桜庭庄太郎、丹下敬一(S11)松本奎三、加藤孝三(S12)西田壮吉(S13)石橋武雄、遠藤玄一(S14)池田進、内藤邦雄(S17)橋本幸二郎(S18)渋谷喜代二近江屋緑郎、鈴木弘(S19)長谷川義信、笈川仁三郎(S23)三田茂、朝倉俊夫、辻原謙三郎、奈良毅(S26)武石欽也、田中浩気(S27)瀬下鉄五郎、加藤英隆、川原田茂(S28)小山孝之助、柏木正之(S29)渋谷明男(S31)熊谷光太郎、村上信夫(S32)岩川作丞図(S39)。

仙台支部総会

○とき　55年8月23日
○ところ　一番町「ノッポ」

例年ならば5月に開催している支部総会も今年は延び延びになり、8月も末になってから、秋田より小玉同窓会長、秋山校長、根布谷事務局員を迎え、昨年同様一番町「ノッポ」で開催した。

まず、鈴木庶務幹事(S28)の司会で開会、菅原支部長(S13)のあいさつに続いて54年度の活動報告、会計報告があり、役員の改選は幹事を若干名追加して三役は留任と決った。

たまにはこういう席で身の引きしまる話も必要であるという支部長の発案で、今日は、平沢哲夫氏(S13、東北電力常務)から専門の「最近のエネルギー問題について」の講話に耳を傾けた。

小玉同窓会長、秋山校長からは、校舎改築計画の進捗状況、最近のクラブの活動状況などつぶさに御報告を頂いた。

引き続いて、当日出席中の最高齢者中村武三郎氏(S2)の乾杯で懇談に入った。常連、初参加会員も交えて自己紹介が初まると、多くの方から在校時代の野球部の活躍の様子と是非野球を頑張って欲しいという切なる願いが続出した。

最後に全員で校歌、副歌、校友会歌、凱歌……を大合唱、来年の総会での再会を約して散会した。

◆出席者
中村武三郎(S2)、斉藤修蔵、見上郁二(S10)、平沢哲夫、菅原兄一(支部長二(S13)、小笠原国三(S14、藤原敬司幹事長、佐藤昇二、戸沢慶一(S16、佐藤喜代雄(S18、林崇(S23)、石田誠一(S25)立川三男、鎌田伸一(S26)、鈴木宏輔(庶務幹事(S28)、佐々木嵯(S29)、船木亨二(幹事二(S31)、小川清(S32)、金谷昌幸(S33)、菅原恒雄(会計幹事、佐々木明夫、内藤文信(S35、田口忠稔、伊藤洋一(S36)、神谷謹一(幹事(S37、小野弘美(S38)、岡田喜秋(幹事(S41)、佐々木芳克、知久誠(S49)。以上29名

男鹿支部総会・講演会
講師に村山多七郎氏をむかえ

○とき　55・10・21
○ところ　男鹿駅前・ホテル諸井

男鹿の海や山々にも秋の香りが漂う夕闇が迫る頃、男鹿支部は、昨年度の総会における重要決定事項である講演会を兼ねての総会を開催した。

まず、高橋良平副幹事長(昭36年)が、「総会に先立って講演会を開催する」旨の司会で始った。

次いで、村上光彦支部長が「講師・村山多七郎氏(昭3年卒)は私と同級生であり、長年に亘って演劇興業等」で活躍されているなど秋中時代のユーモア溢れる想い出を交えながら講師紹介をおこなった。

村山氏は、昭和53年6月、超党派で結成された「朝鮮の自主的平和統一を進める秋田県民会議の代表」として、北朝鮮を訪れた際の見聞を基として、現在、我が国と国交のない北朝鮮の経済・文化・生活の現状を「近くて遠い国―北朝鮮」と題し約四〇分、講演された。

その後「光州事件」の記録映画を上映されるなど感銘を与えた。

引き続き総会に移つり、秋山秀麿幹事長昭27年卒)が「風光明媚な男鹿半島にある男鹿支部の私達が鳥海の高嶺を仰ぎ見て学んだ秋中、秋高の青春時代に帰り、より以上の親交を図りたい」との開会のことばを述べた。次いで、村上支部長の挨拶に続き秋山幹事長が経過報告と来年度の事業計画(総会時に講演会及びカラオケ大会等の開催)について説明があった。更に、吉武貴代美会計監事(昭43年卒)の決算報告及び斎藤幸夫総務幹事(昭44年卒)が会計監査の結果を報告し了承を得た。その後、来賓の花岡奈雲同窓会副会長(昭5年卒)及び山谷浩二教諭(昭20年卒)から挨拶を頂き総会が終了した。なお、事務局から根布谷豪氏(昭46年卒)が出席された。

そして、記念撮影をした後、根岸功長男鹿支部顧問(昭二年卒)が「母校の発展を祈って」の力強い乾杯で懇親会が始まった。

宴が和やかに進むうちに親睦が高まり、自己紹介などの後、先輩、後輩が入り交って、肩を組み合い高らかに校歌、校友会歌を熱唱し母校、秋田高校の限りない躍進と支部員、相互の健闘を祈って散会した。

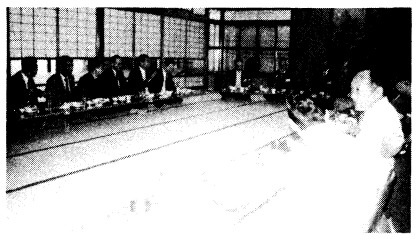
(秋山秀麿記)

大曲仙北支部総会

○とき　55・7・12
○ところ　大曲『対川閣』

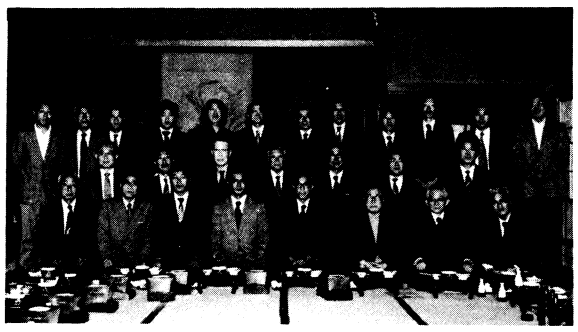
昭和55年度総会は、本部同窓会より小玉孝次郎会長、母校より秋山光雄校長、事務局より根布谷主事をお迎えして開催された。佐藤輝男氏の司会で進められ、伊藤恭五郎支部長のあいさつ、加藤芳男氏の会務報告のあと、小玉会長より校舎全面改築問題について、秋山校長より進学状況、国立大学合格者三百七名は東日本の高校で第一位であること、野球部の全県選抜大会優勝、ラグビー、陸上、剣道の好成績等の話があった。懇親会は会員酒造業者寄贈の銘酒で、鈴木八郎治氏の乾杯に始まり、盛会であった。

▽出席者　T12鈴木八郎治、目黒哲一郎、S2木下孝、S7伊藤恭五郎、伊藤四郎、鈴木良助、S8佐々木長八、S9鈴木光太郎、萬谷忠一郎、S10加藤芳男、加藤市郎、S16小松正一、武田賢亮、S19松塚則明、S20根本幸蔵、S22加沢敏郁、S23高田昭一、佐藤輝男、高橋一夫、S24武部良悦、S27八嶋輝紀、S30斎藤正俊、S31茂木晃、S34辻久男、S38山本美幸。



能代山本支部総会

能代山本支部総会は去る十月十八日午後五時より能代市宮茂登に於て開催された。本部より大嶋副会長と大久保氏、学校より杉田先生が来賓として出席して開会した。柳谷副支部長の挨拶に始まり議事のあと本部と学校側から現況報告を兼ねて挨拶があり、母校校舎の整備等施設の充実と共に学業に運動に夫々前向きに進行していることを知り、意を強くすると共に、母校の益々の躍進を喜び合った。



懇親会に移るや大いに語り合い、興の趣くまま古い応援歌はもとより雲隊の歌まで飛び出し、最後に母校校歌を声高らかに歌いあげ和気あいあい盛会裡に散会した。前出来賓のほか出席者(卒年順)左のとおり。

柳谷清三郎(T8)、畠三郎(T14)、平川民治(T15)、宮腰斌一(T15)、斎藤一雄(S3)、岡正吉(S5)、森沢正勝(S7)、高橋佐七郎(S8)、小林昌樹(S12)、三浦弘信(S13)、織田卿一(S14)、茂木昂(S15)、堀井伸雄(S15)、本田和則(S22)、山口通明(S25)、信太敏彦(S29)、藤野戸成夫(S29)、渡部匡(S30)、塩谷惇(S32)、田中勝三(S33)、宮腰孝昭(S34)、大森嘉男(S38)、今井敦雄(S41)、池内俊元(S48)。

(斎藤　記)

吉成医院
吉成俊太郎(S26卒)
秋田市下新城中野(追分三叉路)
TEL〇一八八―七三―二四七七

五城目町助役
伊藤卓治(S10卒)
五城目町大川石崎
TEL〇一八八七五―二三五七

合資会社川村金物店
代表社員
川村義久(S17卒)
五城目町上町一七六

田口歯科医院
田口誠一(S23卒)
五城目町長町
TEL〇一八八五―二一二四二

今村薬店
カメラの今村
今村龍雄(S34卒)
五城目町御蔵町
TEL〇一八八五―二一二四〇五

㈱菊地製材所
社長
菊地徳一郎(S23卒)
五城目町高崎字里下一六
TEL〇一八八五―二一二五〇

菊地合板木工㈱
常務
菊地成一(S43卒)
五城目町高崎字里下八一―三
TEL〇一八八五―二一四一〇五

五番目きものセンター
鍋鶴
専務
鍋谷鶴芳(S46卒)
五城目町字下夕町二一六
TEL〇一八八五―二一二〇二七
〇一八八五―二一二七四九
(なべつる荘)

渡邊歯科医院
渡邊時治(T13卒)
五城目町字下夕町六六―一三
TEL〇一八八五―二一三二〇二

安東歯科医院
安東誠(S13卒)
五城目町上町四三
TEL〇一八八五―二一二二二九

畑沢医院
畑沢実(S17卒)
五城目町今野
TEL〇一八八五―二一三五三七

カトウ呉服店
加藤千雄(S28卒)
五城目町新町
TEL〇一八八五―二一二一三

五城目ファミリーパート
長源
長谷川実業
代表社員
長谷川定夫(S43卒)
五城目町字下夕町61
TEL 01885―2―2069

小浜歯科医院
小浜哲朗(S44卒)
五城目町大川西野田屋下二三二
(五高前)
TEL〇一八八七五―五一三二

米穀・飼料
肥料・農業
渡一商店
社長
渡辺一雄(S9卒)
山本郡琴丘町鹿渡駅前
TEL〇一八五八―七―二〇八〇

昭和五十五年 昭五会例会報告

卒業後五十周年を迎えた昭五会は昭和五十五年の会合を九月十四日（日）全運会館（秋田市山王六丁目）で開催。

昨年から、遠くからの出席者の便宜を図るとともに、旧交をより深くあたためるためにもと、宿泊して会を持つことにした。

定刻近くのロビーはお互いの健康を喜び合い、往年の紅顔の面影をさがしあったり、談笑する声が明るかった。

午後六時開会。花岡泰雲幹事の開会のあいさつのあと、1　母校創立百十周年行事への協力、2　来年度昭五会を九月に、ことしと同じく宿泊して、3　秋田市在住の会員の交流（昼食会など）などを決定し、記念写真をとり、懇親会にうつった。自己紹介、欠席会員の現状報告あり。出席者二十七名。内県外からの出席五。話題はもっぱら在学時代の思い出。話がはずめば、酒量も増し、幹事おおあわて。興趣たかまって時間足らず。あとは各自の部屋にもどって延長戦。

翌十五日は午前九時。気嫌よく来年の会合を約して解散。以上

（相沢謙一記）

原　正朝先生を迎えて

八月二十一日、昭和二十一、二十二年卒の十五名は、懐かしい原先生が来秋される由を、鈴木勝三郎先生からお伺いし、急遽相集い原先生を囲む会を開いた。

鈴木先生にも御参加いただき、原先生から、秋中在職当時から、奈良への帰郷、中国への出征、そして、現在、神官をなさっているまでのお話しをうけたまわった。

ふくよかになられた原先生の口から、昔懐かしい「ゴンボ」調のお話しが次々と出て、飲むほどに酔うほどに、懐旧談に花が咲き、楽しきつどいを満喫し、先生との再会を期して別れた。

◆当日の出席者

鎧屋茂富、堀井孝、小野二二、佐々木忠丸、井筒顕、伊藤孝悦、戸島弘、大友次男、酒井英、高橋徳雄、柳田英治、佐藤直彦、碇谷鉄夫、佐藤鉄男、杉田宏、大島三代助。

東北電力本店 羽城会

○と　き　55・7・11

○ところ　仙台　桂仙荘

土砂降りの雨の中、それでも開会予定の18時には殆んどの顔ぶれがそろっておりました。

もともと本店は人の動きが激しい上、前回集ったのが52年7月ということもあって、まず自己紹介から初まりました。仕事の上では以前から付き合いがあっても同窓とは露知らず、「先輩だったスカ」と頭をかく光景もあちこちに見られる始末、何しろ平沢先輩（S13）から最若年の岩見氏（S48、当日欠席）までの間が35年も離れており、本店内の住人が2千人余りとなれば当然かも知れません。

ここ数年来、会社の外も内もなかなか厳しい情勢が続き、皆そろって集る機会が作れなかったのですが、これからは年に一度は必ず開こうということで役員の選任をすることにしました。

会長　藤盛光生氏（S24）

幹事　新田目倖造氏（S30）

神谷謹一氏（S37）

（なお当日は会長が桜田馨一氏（S19）となっていたのですが、その後異動で出向されたので、現在は後任に藤盛氏が会長となっております。）

秋田の話、学校の話、仕事の話……と、話題はいつまでも尽きないのですが、最後は肩を組み合って校歌・副歌・校友会歌の大合唱で閉会となりました。

◆出席者　平沢哲夫（S13）、佐藤昇次（S16）、佐藤儀一（S18）、桜田馨一（S19）、藤盛光生（S24）、菅野淑夫（S24）、立川三男（S26）、佐々木邦生（S27）、鈴木宏輔（S28）、千葉勝司（S29）、新田目倖造（S30）、船木亨一（S31）、田口忠稔（S36）、神谷謹一（S37）、照井健（S37）、北島利夫（S41）、鈴木恭介（S42）、石井峰夫（S44）、以上全会員25名中当日18名出席。

不惑のクラス会開く

私どもは、卒業最後の年（二十九年三月卒）に栄えある創立八十周年を迎えたことを誇りとし、「八十期会」という絆で結ばれた最も活発？な年次と自負している。

五十五年早春開催した八十期会の席上、二Ｆ有志が、卒業以来二十六年ぶりにクラス会（担任・山下先生、男子四十名、女子十二名）を開こうと衆議一決、さっそく北は北海道、南は九州まで、全国各地にて活躍中の各位に呼びかけた。

案内状には当時を偲ぶ、なつかしい学級写真のコピーを同封したところ、大変好評であった。

盛夏の七月二十六日（於花亭）、公私とも多忙な年代故か、県外からの参加者は少なかったものの、女子三名を含む十四名が集い、恩師山下先生を囲みつつ、遠い昔の話に花を咲かせた。

光陰矢の如し……我が子を母校へ入学させている、齢四十五ともなれば、腹が出て貫禄十分な人、頭髪は先生に勝るとも劣らぬほどうすくなった人、昔日の面影そのままの人等々、文字どおり時間の経つのも忘れ、楽しく愉快な一夜を満喫した。

やむを得ず欠席こそしたが便りを添えて返信をくれた人がたくさんいた反面、沙汰のない人もかなりの数にのぼり、一抹の淋しさをフッと感じ、残念であった。了

（西村　記）

秋中六十二期会

○と　き　55年11月8日(土)

○ところ　秋田市内琴山荘

今回は県内在住者三十九名が集う。藤田幸雄君の「生命の軽さと、生きることの重さを感じる」という我々年ごろの人生雑観を述べた挨拶。今春現場を退かれた恩師、加藤仁美先生から、中国視察談を中心とする人生の節目について、懇ろなお励ましのあと、高山重雄先生のメッセージに湧く。

情報交換の中で、在国連明石康の県『教育時報（55年9月号）』寄稿、秋田の教育が紹介され、往時を偲ぶに充分であった。また、母校創立百十周年記念事業にかかわる名簿整理、募金対策など、いずれ準備にかかることなども話し合う。

折しも荒天。次に記す者どもの酒炎、とどまるところを知らなかった。

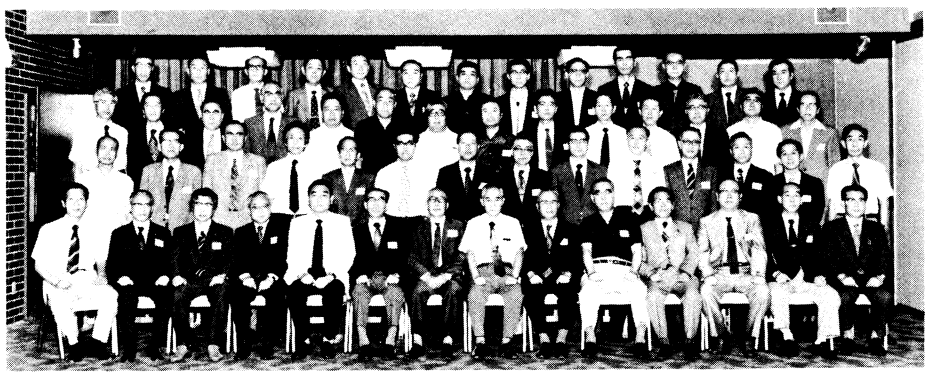
相沢幸四郎、井川一夫、石黒兵四郎、伊藤鉄也、大島隆志、小野稜、太田平八郎、加藤　茂、加藤　肇、貝田雅男、小玉正次郎、小西寿一、近藤重昭、斉藤広孝、佐々木嘉範、笹原秀雄、佐藤昌義、佐藤英夫、佐野謙二郎、志渡和夫、白川栄治、進藤日出夫、菅原春夫、高橋雄一、高泉宏作、田口誠一、原田亮吉、日野浩宣、広島吾朗、藤田紀一、藤田三智行、藤田幸雄、藤井正文、本郷　真、松岡　稔、宮沢惟安、八重樫亮二、安田庄一、渡部忠夫。

昭和二十年（五年制）卒同級会

昭和二十年（五年制）卒同級会が卒業三十五年を記念し五年ぶりに行われた。

七月二十六日(土)午後五時からニューグランドホテルを会場に、学校より秋山光雄校長先生、恩師の小島好治、鈴木勝三郎、関喜四郎の各先生方をおむかえし、五十一名の同級生が参会し賑々しく開催された。

私たちは昭和十五年に秋中に入学、二年生のとき太平洋戦争がはじまり、五年生の昭和十九年に川崎の工場に動員、二十年の卒業式は現地工場で玉木校長先生ほか数人の先生の二参列のもとで行われるという、長い秋高（秋中）史上にも類のないさびしい卒業式であったと思われる。しかし一年間同じ釜のメシをくったという同志的なつながりは、他の同級生にはみられない現象でもあると思われる。



同級生の中には已に鬼籍に入った人も二十数名おり、いまさらながら月日のたつのが迅いことを痛感させられた。

今後は二年に一回ぐらいのわりで同級会を開くことを確約し、次回を楽しみに九時散会した。

（幹事岩城記）

大正十一年卒の同期会　湯瀬温泉 滝ノ湯ホテルで

秋中を卒業してから五十八年、同期生のうち現存を確認し得た者四十名、同期会の案内に返事をくれた者三十九名。大部分は病臥中とある。出席者四名とは寂しい。

十月七日、湯瀬温泉滝ノ湯ホテルに集ったのは、大阪の会田昭八郎、大内麟次郎、県内の成田総一郎、松本源太良。寂しいだろうと松本の妻と東京の娘が駆けつけてくれる。

切りタンポに心和みつつ静かに語り合う。それぞれ異なった人生を歩み、よく生きて来たものである。果ては、昔の歌を大合唱して時のたつのを忘れた。（G）

㊟斎藤製材所
斎藤久一（S13卒）
南秋田郡八郎潟町一日市
TEL〇一八八七五―二〇一三番

一日市印刷
代表者
工藤昕郎（S31卒）
南秋田郡八郎潟町一日市一区
TEL〇一八八七五―二〇三八

第一道路建設有限会社
代表取締役
小林誠（S36卒）
山本郡琴丘町鹿渡字焼野
TEL〇一八五八―七―二八〇八

小玉建設株式会社
専務取締役
小玉茂隆（S42卒）
山本郡琴丘町鹿渡字西小瀬川

昭和商事有限会社
山本運輸有限会社
（日本通運委託店）
代表取締役
竹内邦夫（S43卒）
取締役
北島松男（S32卒）

男鹿市議会議長
目黒晃治郎（S4卒）
男鹿市男鹿中滝巻台
TEL〇一八五―三三二―二九八〇

安田医院
安田正男（S18卒）
男鹿市船越
TEL〇一八五―三五―三一一五

高橋医院
高橋實（S26卒）
南秋田郡八郎潟町字一日市八四―一
TEL〇一八八七五―二〇五七

内科・精神神経科
医療法人仁政会 杉山病院
院長
杉山和（S36卒）
南秋田郡昭和町大久保字北野
TEL〇一八七七―六一四一(代)

インテリアデコレーター
中嶋装飾
代表
相馬恭一郎（S42卒）
八郎潟町中嶋一四八
TEL〇一八七五―三三三七

株式会社畠慶木工
専務取締役
畠山信一（S42卒）
山本郡琴丘町鹿渡字西小瀬川一五七
TEL〇一八五八―七―三三三七

有限会社秋田ブロイラー
代表取締役社長
小武海英明（S45卒）
南秋田郡井川町坂本字飛塚一三三
TEL〇一八八七四―二〇三一

事務用機器・本と文具と教材
㈾しみず文具
清水敏郎（S17卒）
TEL二四―五一八一

日本石油株式会社特約店
秋田日石株式会社
常務取締役
木田橋一雄（S31卒）
男鹿市船越字船越七―二
TEL〇一八五―三五―二二五四

昭和25年卒同期会

卒業三十年を記念した昭和25年卒の同期会は、9月26日(土)秋田ニューグランドホテルを会場に開催、遠くは岡山、兵庫からの参加もあり、同期生二五〇名、恩師十一名、来賓二名、計二六二名の盛大なパーティーとなった。

恩師としては鈴木勝三郎先生他十名、兵庫芦屋高校の伊藤科先生も、来賓として小玉同窓会長、秋山校長先生を招待した。

三十年を記念の会とした同期会は、次の行事を計画した。

1、記念文集の発行
2、同期会会歌の作成
3、思い出の佳人招待

記念文集はA4、三八〇頁の大冊で「季節のかなた」として作成、一冊一三、〇〇〇円となったが、広告費二八〇万円をこれにあてて七千円として頒布。

記念歌は、演歌「こんな男になりました」作詞・大友康二、作曲・小野崎孝輔、歌・柳沢恪と同期生トリオでテープ化　発売中。

佳人の招待は、選考委員会まで設置したが、多少の問題があるということで、一週間前にゴハサンとした。

中通二丁目の「角繁」の二階に事務局を設置、アルバイトの女の子をひとり雇って五か月、幹事を中心に力をあわせた結果、三十年にふさわしい劇的なつどいの会となった。参加者、次のとおり。

（大友　記）

写真①
吉川貞吉　金子降治　神田勉治　加賀谷謙広　近江谷成宏　近江谷平降　小野崎孝輔　小川哲男朗　太田豊一　鎌田信和　鎌田潔朗　大野辛一　北川村祥郎　大林春吉　畑基一　梅津達朗　江佐美悦　上田高昌　猪股也章　井上一　井筒豊　伊藤吉雄　岩井栄一　磯村朝次郎　池内広一　黒太喜司　石川寛司　石川永治郎　石井稔　石井彦　石井隆一　石塚寿彦　荒川元　荒井渡献　秋本正俊　会場愛世

写真②
鈴木重雄　鈴木富次郎　鈴木繁　菅原淳三　菅生時夫　菅原正夫　菅野稔　鈴木孝一　藤進　嶋田昇　野田衛　柴崎大　塩谷稔　猿田政一　鈴木降孝　清水重　神馬市之助　佐藤運　佐藤治三郎　佐藤監悦　佐藤信一和　佐藤陽毅　佐藤真一　佐藤博　佐藤健一　佐々木洋一　佐々木幸一　佐々木定二　佐々木清一　佐々木定一　佐々木広一　佐々木喜司　斎藤久正　今野善治　今野弘夫　小林信孝　小林良弘　小玉林豊　小松文雄　小泉純一郎　熊地富士夫　倉部浩司　工藤魁　京野洋吉

写真③
三浦礼司進　三子崇　益田一男　正宇美　三浦真　田中孝一　筒井喬一次　辻田勉　与門文男　富岡良郎　中村忠一　中道伸一郎　長野伸一俊　永井忠一　新岡雅　西山勝雄　橋本義弘　福田裕兼四郎　福島紀夫　藤本英治　藤松浪一　真崎庄助　正田一男　桜田高廣　渡部恒男　伊藤恒誠　渡辺繁清　渡辺伸雄　和田朗　石塚かおる　長谷川吉一　長谷部昭　人見亮　事務局　山田俊三　山口吉栄　山口恒夫　山口通明　柳沢英格　若林敏祐　若松彦　渡辺一　渡部京一郎　渡辺勝郎　水沢研一　水沢源太郎　皆川昭宏　関下澄　関口恒夫　同窓会会長　小玉　秋田高校長　光雄　秋田高校長　山本　鈴木孝郎　町田与郎　田村甲　人石正　一先牛　中山嘉四郎　関口孝次郎　加藤仁博　菅原美之　深井健　伊東繁　菅野斜雄

写真④
加藤昭七郎　三浦楫夫　三浦恒裕　稲見忠彦　五代儀真　三浦恒裕　三浦真一　佐々木定一　佐々木清二　佐々木幸一　佐々木洋一　佐々木幸一　佐々木博　佐々木健一　佐藤治三郎　佐藤監悦　佐藤信一和　佐藤陽毅　佐藤真一　佐藤博　佐藤健一　佐々木洋一　佐々木幸一　佐々木定二　佐々木清一　佐々木定一　佐々木広一　佐々木喜司　斎藤久正　今野善治　今野弘夫　小林信孝　小林良弘　小玉林豊　小松文雄　小泉純一郎　熊地富士夫　倉部浩司　工藤魁　京野洋吉

秋高昭和25年卒同期会会歌
卒業30年記念歌

「こんな男になりました」

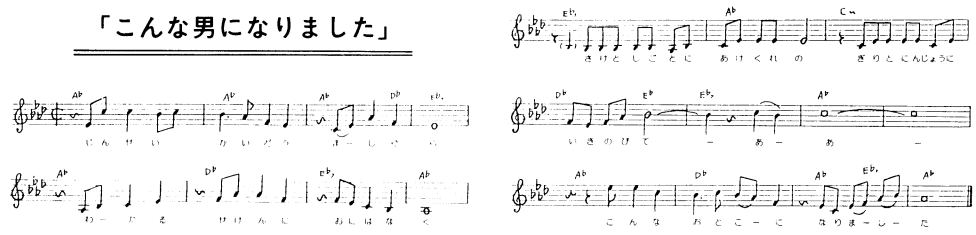
作詞　大友康二
作曲　小野崎孝輔
唱　柳沢恪

①
人生街道　まっしぐら
渡る世間に　鬼はなく
酒と仕事に　明け暮れの
義理と人情に　生きのびて
ああこんな男になりました

②
戦後派に　なれもせず
大正気質も　親しめず
悪の栄える　世の中を
根なし浮草　さすらいて
ああこんな男になりました

③
花の中年　過ぎたけど
枯れて実もある　種もある
俺の人生これからと
年を忘れて　はしご酒
ああこんな男になりました

④
秋高出てから　三十年
青春なつかし　白線帽
燃える想いを　秘めたまま
胸に画いた　セーラー服
ああ夢のあの人どうしてる



若菜会

女子卒業生　親睦の集い

○とき　55年8月9日
○ところ　協働社大町ビル

「気軽に形式ばらずに楽しく一夕を共に過そう」「なつかしい恩師と、お世話になった先輩、そして同級生、後輩とおおいに語り合おう」と始められた若菜会パーティーも今年で五回目を迎えた。

今までは秋に開催していたが、今年は初の試みとして、遠くからも帰省するお盆にと八月、開催された。

何よりもうれしいのは、毎年この会に多数の恩師の先生達が参加してくださることである。今年も秋山現秋田高校の校長先生を始め十二人の先生が参加してくださった。そして先生達は先生達で、古き良き時代の秋田高校のお話をなつかしそうに話され、それを拝聴する私達も又嬉しいのである。現在の高校生をみるにつけ、聞くにつけ、あの頃、随分と密度の濃い教育を授かったものだと改めて痛感させられる。すぐれた先生達に囲まれて青春時代を過したことは、一生の幸せであり、思うに一生の貯金であるとさえ思えるのである。

今回の参加者は三十八名、一期生から若い方は四十五年卒まで。

遠い所では岡山市、三重県津市などから。

出来上った写真をみると吉井先生のおひざの上にいつの間にか、チョコンと座っている可愛いいお嬢ちゃん。マッ!?先生いつお孫さんをと思いきや、実はこれは寺田「旧姓菅原」和子さんの子供さんなのだが、先生曰く「子供はちゃーんと人をみるからね」……。

若菜会、いつまでも若菜の如く若くすこやかであれと祈りつつ……。

（高島　記）

◆来賓＝秋山光雄、桜谷吾朗、大網定義、成田朝春、深井博之、大嶋俊平、小松元也、青山成美、藤原岩太郎、館岡昇一、山谷浩二、吉井忠亮の諸先生（お送事到着順）。

◆出席会員＝二九年　秋山まり子、井上房子、軍司路子、三〇年＝山寺慎子、打矢幸子、沢口秩子、高貝恭子、三一年＝高橋裕子、平塚史枝、下田章子、森山節子、大山ユヨ、成田凉子、矢野昌子、佐藤康子、加賀谷悦子、三二年＝中川鞆絵、高橋伊智子、和田律子、三三年＝高島清子、阿波加順子、脇坂良子、石黒敦子、三四年＝高宮恵子、高橋貞子、三七年＝三浦美沙子、三八年＝五十嵐和子、寺田和子、三九年＝速水洋子、戸田倫子、四〇年＝福田二代、四一年＝石川紀代子、小林淑子、四二年＝清沢三代、奥平長子、中村順子、四四年＝石河三紀子、四五年＝都崎富美子。

秋田市　〝働く婦人の家〟　館長に　沢口秩子さん

去る七月十二日、秋田市働く婦人の家において、館長就任間もない沢口さんを囲んでのお祝いのささやかな会が開かれた。施設見学を目的とした〝若菜会〟有志の集いということで同館の会場を借り、かつての秋高女生徒にとっては担任のような存在であった恩師佐藤かつ先生をもお招きし、沢口さんの同期生が呼びかけての開催である。若菜会会長の秋山まり子さん、川口市から遠路わざわざ来られた千葉和枝さんなど三期生までの十二人が参加しお祝いの花束贈呈のあと、なごやかな思い出話や、近況報告〝働く婦人〟としての意気ごみなど語り合い、夕方散会した。

沢口さんは秋高伝統の「自主独立の精神」を独自の形で生活の上に展開されており、女性として家庭を守りつつ民間人の立場で社会教育の仕事を貫ぬいてこられ、その実践が認められて初代の館長となられたものである。

秋高における男女共学の高校生活を、佐藤かつ先生のお言葉を借りると「なにがどうなることか、いつもハラハラして」いたという暗中模索時代の一、二、三期生は〝物珍しさ〟の眼をもって世間に見られていたことなど昔語りとなってしまったが、あの時代に蒔かれた種は、今まさに一つの実りを得たとも言えよう。参会者の表情は、皆かっての秋高生時代のように輝いていた。

沢口さんは館長として「働く婦人を広義にとらえて、婦人の生き方を真に豊かなものにするための広い視野と斬新なアイディアをもって運営していきたい。」と抱負を語っていた。

（昭和三〇年卒）

医療法人敬徳会
藤原記念病院
藤原慶之
（S28卒）
南秋田郡天王町天王字上江川47
TEL 018878－3131(代)

セイコーグランドホテル
専務取締役
佐藤正昭
（S38卒）
男鹿市北浦湯本・男鹿温泉郷
TEL〇一八五－二三－二一三一

寒風石材建設株式会社
菅原広悦
（S43卒）
男鹿市脇本富永字野田一〇番地
TEL〇一八五－二五－二二一(代)

能代病院
松野朝造
（M45卒）
能代市大手町四－六
TEL二－六三三一・六三三二

畠三郎
（T14卒）
能代市中和二－一－三
TEL二－三四－一三

三浦亀雄
（T14卒）
能代市大町九－四三
TEL二－三九二二

船川印刷紙工㈱
専務取締役
味戸暢男
（S31卒）
男鹿市船川港栄町三－八
TEL〇一八五－二三－三八一(代)

秋高三六年会男鹿地区
斎藤久夫（秋田県庁）
沢木勝利（ハトヤ）
高橋良平（高橋鉄工所）

高野商事株式会社
代表取締役
高野寛志
（S39卒）
男鹿市船川港羽立
TEL〇一八五－二四－二〇五三

時計・メガネ・宝石
由利時計店
由利均
（S43卒）
男鹿市船川港元浜町
TEL〇一八五－二四－三四〇一

柳谷清三郎
（T8卒）
能代市大手町七－四三
TEL二－六四二〇

西村醸造店
西村節朗
（T14卒）
能代市日吉町一四－二八
TEL二－〇四九九

秋田県公安委員長
平川民治
（T15卒）
能代市中和二－六－四
TEL二－五五二一

来年度への期待
——伝統はよみがえる

硬式野球の春の選抜優勝七年ぶり東北大会出場を皮切りに、昭和五十五年度の秋高の部活動は運動部に文化部に燃えに燃えた。全国級の大会出場は少なかったが、春の中央地区から秋の新人戦・コンクールまで、各種大会に優勝、準優勝が相次ぎ、「伝統が甦る」かの観を呈した。今年度大活躍して、特に来年度に期待を集めている各部の横顔を紹介し、顧問・監督に抱負を聞いてみた。

来年こそ甲子園へ
硬式野球部

甲子園出場こそ逸したが、今年の硬式野球の活躍は目覚ましかった。春の選抜優勝。夏、準優勝。新人戦選抜準優勝と続き、しかも相手校がそれぞれ全国大会で話題をさらったので、来年は是非甲子園と秋高千五百健児の夢を掻き立てている。

部長の竹内一朔先生は「経大付高に勝たないことにはどうにもならない。しかしトータルからすれば本校は全県一ですよ。秋商が国体準優勝、付高が早実と対に戦うし、全国レベルです。来年も石井浩郎（1年）中心の打撃のチームですが破壊力は増しますからね。ここ数年と言わず、出場できますよ。」と力強く語ってくれた。

全校応援を再び
サッカー部 ラグビー部

今年の秋高の部活動を根底から揺さぶったものに、サッカーの総体初制覇・全国大会予選準優勝、ラグビーの総体・全国大会予選の準優勝がある。四試合とも秋高は必勝を期して全校応援をもって臨み、怒号に等しい選手の激しい動きを呼んだ。

折から生徒会が「応援の自由」をめぐって、LHRや全校集会を開いていた矢先だったので、一層盛り上がった。「行け」—スタンドから鋭い声が飛ぶ。応ずるように鈴木東樹が蹴り小玉智がヒデングし名キーパーの須田洋一が守って—念願の初優勝秋高2—1秋工。

紫地に三剣を白く染め抜いた大幟が久々に六月の空に翻る。ラグビー決勝。相手は同じく秋工。走れ—弾けるように秋高フィフテーンが左右に展開する。後半スタミナ切れで逆転を許し涙をのんだが、互角の力量は讃えられ八柳悟主将以下六名を国体に送り込んだ。

サッカー船木均先生談「三年生がすべてだった。従って来年は戦力的に劣る。特に肝心のキーパーがいない。どうカバーするか。」

ラグビーの高橋秀雄先生は「フォワードがいま一つだが、善戦はするよ。今年はいいのがいた。走るし、拾うし、ぶつかるし……。」と思い出の中に身を躱した。

ともに行けるかインターハイ
剣道部・弓道部

全県総体個人戦で優勝・準優勝を占め、インターハイ・国体とアベック出場を果たした鈴木康倫・山崎裕史（共に2年、実力は全国レベルと聞く）を擁する剣道は過去の栄光を取り戻せるか。

渡辺忠監督に聞いてみた。「団体優勝ね。鈴木はいいとして山崎にもう一つ安定性が欲しい。一年生に東海林斉（中学団体全国優勝の主力選手）という選手がいて、これがいい。この三本柱ががっちり勝てば可能ですが。」と慎重だった。

今年度燃えた部の一つに弓道部があろう。中央地区準優勝。総体三位。連盟主催の全県・県体・全県新人戦と三回栄冠を勝ち得た。過去にインターハイ・国体と何度か出場しているが、ここ二年程低迷を続けていただけに大きな収穫だった。顧問（筆者）として一言述べさしていただくと、「遊びの部から勝つための部に体質改善した。勝つことはすべてでないが、勝つための精進の過程の精神の緊張は自律を求める自由人の修業に欠かせない。幸い部員が理解してくれキャプテンに人（前期佐藤晋後期浅野英樹）を得た。ドングリの背比べをとにかく抜け出さねばならない。ためには今より一層基本に忠実な厳しい練習と苛酷性に堪える精神の修養が必要。そんな部になった時、インターハイも確かなものになる筈。」（田口記）

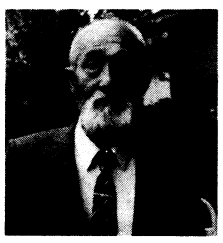
演出に演技に理解を行き届かせて
演劇部全県初の最優秀賞獲得

春からエネルギーの噴出する運動部に比べ、本来「静」の文化部はどうだったか。まず放送が名乗りを上げた。朗読番組—小野律子（1年）の全国大会出場。またタクトの健在を示して、ブラバンが一昨年に続いて東北大会へ。そしてここ数年部員不足に悩んでいた演劇が内包する自らの悩みを克服して、見事全県コンクールに歩を進めた。

上演作F・アラバールの「二人の死刑執行人」—幼児の記憶に第二次大戦の傷痕を刻む異色作家。本校演劇部が一度立ち向かい、困難さの故に未完成のままに胸に深く蔵した作品。高校演劇人の誰彼の登頂を拒否してきた奇岩。それを時をかけて暖め、確かな作品理解のもとに、舞台に形象化した。金香（2年）はじめ八名。数は問題でなかった。秋高生の持ち味を生かしての快挙。全県コンクールでも満票を得て、文句なしの最優秀賞に輝いた。今年度は二月に東北地区で上演、いよいよ来年度全国高校文化祭秋田大会。本校演劇部が初の全国コンクールに出場することはほぼ確実だろう。

顧問の近藤貢太郎先生談、「リアルな作品では太刀打ちできませんからね。脚本選択が主因でしょう。部員数に応じたというより、本校生の持ち味に合った作品ですね。十年前単独上演してみて、難解さの故に不十分不満な舞台になっていたものです。中央から来た審査員が偶然にも二人ともアルバールについて関心の深い方だったし、特にその一人はアルバールの友人だと言っていましたから、審査員受けする芝居だったんじゃないですか。『優れた演技者を得てはじめてこなし得る作品で、セリフに勢いがありました』と評していました。全県は初めてなのでやはうれしい。全国コンクール秋田大会出場については二月に東北地区がありますからなんとも言えませんが、主催県から一校ということですから手応えは十分というところです。」（田口記）

先輩訪問（その三）
川井忠臣氏（T3卒）



川井さんは明治四十三年、太田達人校長の時に秋中入学、ボート部に入った。軍艦三笠見学のためのボート遭難事件には、当然参加するところだったが、当時興味を持っていたニワトリの新種が友人の家に着いたのを見に行ったために危うく難を避けることができたとのことである。

三年の時、湯目補隆校長が制服の袖とズボンに赤線を入れ、その上に校章も変えると言い出した。憤慨した生徒たちが騒いでストライキ寸前までいったが、市会議員や県会議員、それに弁護士の先輩たちのとりなしで大事には至らなかった。

児玉実徳校長の大正三年、卒業写真をとった。ところが中の一人が後向きになってガッツポーズをとっていた。ケシカランというので写真は焼却、その生徒は退学になった。五年生一同は自分たちだけで卒業写真をとろうと千秋公園に集合した。遅刻者が三、四名いる。川井さんは得意の健脚で家々を回り、やっと全員そろった。その時の写真二列目左から三人目、テアグラをしてそっくり返っている美少年が川井さんである。

川井さんは走るのが得意で、手形の踏切から踏切まで汽車と競争してハードトレーニングをした。秋田発の汽車には三尺差で勝ったが、土崎からくる上り列車には一間ほど負けたという。

運動会で、鉱専、師範、工業、大館中、横手中、本荘中、大曲農を招待して二百米競争をすることになった。横手の選手は仙台まで行って一等をとった強豪である。ヤマグボ（小室）先生から川井さんは呼び出された。五年の選手が辞退して、三年の川井さんを推薦したから出ろというのである。川井少年は言った。「オラ一年からずっと三等行状だ。先生、三着以内だったら二等行状に上げてくれるスカ。」

行状とは操行点で、三等は一番下で、それ以下は落第である。

ヤマクボ先生が、「ヨシ！」と約束してくれたから、川井少年は走った。一着であった。記録は22秒。横手の強豪は三着であった。

走るのは平気だったが、胴上げでヘトヘトになったと川井さんは笑う。何とも小気味のいい話である。その後ヤマクボ先生に帳簿を二等行状に確かに直してもらったはずだが、火災で焼けてしまっただろうと残念がられる川井さんのためにこの紙面に書きとめて明らかにしておく次第である。

川井さんは酒タバコはやらず、二十一歳から冷水まさつ（途中タワシから乾布に変化）、三十二歳からは腹のまさつをされ、去年からは足の裏のまさつを加えられている。そのためか、乃木さんに似た白髯に、最近少しずつ黒い毛が交ってきたそうである。

川井さんがますますご壮健で母校の歴史の証人として長生きをしてくださるよう心から念ずるものである。（一関記）

秋高同窓会史稿 ❹

川井さんは酒タバコはやらず、二十一歳から冷水まさつ（途中タワシから乾布に変化）、三十二歳からは腹のまさつをされ、去年からは足の裏のまさつを加えられている。そのためか、乃木さんに似た

◎同窓会費

大正四年八月、創設された同窓会は、会費年に五十銭であった。大正六年八月には、会費五十銭はそのまま、新入会員は入会の際五十銭を納めることになり、また一時金五円ヲ納ムル者ハ爾後ノ会費ヲ徴収セズとなった。

大正九年八月には、会費も新入会員の入会金も一円となり、一時金十円以上ヲ納ムル者ハ爾後ノ会費ヲ徴収セズとなっている。つまり五年間で二倍に値上りしたわけである。

◎秋田中学校奨学会

大正十二年九月発行ノ同窓会報（第九号）によると、「秋中の誇り奨学資金は漸く大を為せり」という見出しで、次のようにその経過を報している。

——秋田中学校の奨学会は明治二十九年の創設にして、当時の学校職員は生徒勧学の実状に鑑み、奮起して各自俸給の幾分を醵出し、成績優良にして学資に乏しき生徒に対し学資を給せんことを企てたり。偶々この挙を賛し、資金を投ずるの篤志家九十五名を得、資金合計十二百円に達したるを以て、三十二年以降、此等の生徒に対し学資を支給し相当の成果を挙げつつあり。昨年九月、五十年記念祝典に際し、校友会及同窓会は其募集金の残金三千八百円を記念事業として之に繰入れ合計五千円としたるが、其後在支那の会員（土橋正、太田俊三、三田宗治郎、石井政吉、本間貞亮の五氏）より五十円を寄付せられたるを以て、之を奨学資金に編入し、現在金五千二百九十二円八十四銭となり（九月二十八日現在）将来最も有意義の支出を為さんとす。故に今後に於ける篤志の寄付はなるべく奨学会に編入し、之の資金の増成を図らんとす。幸に御賛成あらんことを望む。——

これが、大正十三年には五千七百円に増加し、母校奨学資金の基礎はいよいよ強固になってゆくのである。

西居校長は在校生三名を選抜して、授業料其他の校費及び教科書代に限り供給、その成績すこぶる優良で期待される。三沢前会長遺族や会員の寄付で、大正十四年九月十二日現在で資金は六千百四十五円となっており、校医の先生方からも遠からず多分の寄付あるべき予約があったとある。

◎校友会運動部後援会創設

運動部後援会は大正十三年の同窓大会で提案され、役員会で協議をすすめ、大正十四年七月、役員会において、同窓会直接の事業となさず、有志を以て組織することに決定されたものである。

規程によれば、次の如し。

第一条　本会ハ全国的運動競技大会ニ派遣セラルル選手ノ遠征費並ニ之ニ準ズル費用ヲ補助スルヲ以テ目的トス

第二条　本会ハ秋田中学校ニ関係アル者及一般篤志家ヲ以テ組織ス

第四条　本会ニ左ノ役員ヲ置ク

会長　理事若干名　書記一名

会長ハ秋田中学校同窓会副会長ヲ推シ理事及書記ハ会長之ヲ委嘱ス

そこで、会長は岡忠精、理事は安倍仲雄、佐野良太郎、大嶋重明、和田広吉、小貫太郎、大山宏、伊達芳太郎、橋本平太、蓼沼栄治、古村精一郎、進藤作之丞、湊吉治、鈴木毅の諸氏となっている。

会員は資金として一か年一口二円を何口でも負担することになっているが、その年の十一月五日現在で、すでに資金は三百八十九円に達している。

宮腰斌一（T15卒）
能代市富町一〇—二〇　TEL二—六六六二番

織田内科医院
織田卿一（S14卒）
能代市大町四—三　TEL二—五三二三

平孫醸造店
平川孫兵衛（S20卒）
能代市万町六—三八　TEL四—一〇七七

東北電力㈱
能代営業所長
加藤津賀男（S20卒）
能代市富町四—三六　TEL二—七一四一

能代郵便局
山口通明（S25卒）
能代市上町九—一　TEL二—三三七二

工藤眼科医院
工藤英夫（S31卒）
能代市畠町三—一　TEL四—二三〇五

秋田県厚生農業協同組合連合会
山本組合総合病院
院長
大渕宏道（S37卒）
能代市柳町十二番三十三号　TEL二—三一一一

内科・小児科　小林医院
小林昌樹（S12卒）
能代市中和一—一—二　TEL二—四六一六
小林節（S42卒）
東北大学医学部第三内科在学中

茂木内科医院
茂木昂（S15卒）
能代市栄町一—一　TEL二—七二〇九

能代労働基準監督署長
近間周蔵（S20卒）
能代市追分町四—五　TEL二—六一五一

秋田銀行能代支店
本田和則（S22卒）
能代市御指南町三—三七　TEL二—六〇五六

北部建設㈱
社長
北林祥伍（S25卒）
能代市万町一三—一五　TEL二—九四五三

料亭宮茂登
塩谷惇（S32卒）
能代市西通町五—四　TEL二—六一四一

小児科内科　藤原医院
藤原高司（S29卒）
秋田県鷹巣町　TEL〇一八六六—二—二八八二

随想

昭三会便り

村山多七郎（昭3卒）

私達昭三会は明治四三年、四四年生れが中心だから、現在年令的には六九才、七〇才が多く明治も末期ということになり、同窓会の会合でも上座組になってしまいました。考えれば、我々の人生も、明治、大正、昭和と三代にわたり日本の激動の歴史でもあります。

私達の秋田中学入学は大正十二年で、秋中創立五十周年の翌年でもあり、入学した九月には関東大地震もあり、世の中が大変不景気の頃でした。当時秋田県の中学校は秋田、横手、本荘、大館の四校だけで、当時の秋中の入学者は全県から応募した二百名でした。競争率は三倍位、昭和三年の卒業時は転校その他で一五〇名位に減りました。昭和五五年の今日では、七〇名位が死亡し、生存者は八〇名位になりました。昨年だけでも、石井秀雄、館岡正利、加藤圭之助君の三氏が死亡し、年々会員が減少して行くのが淋しいかぎりです。

昭和三年頃の東北地方は特に不景気がひどく、農家では娘を売ったのもこの頃でした。学校を出ても職が無かった頃なので、同級生の一五、六名が秋田師範学校の二部（一年間）に入学し小学校の先生になった関係で、今では校長の停年者が割合多くおります。

昭三会は前後の学年と比べ、ある意味では不作な年で、俗にいう、有名な政治家も、官僚も、実業家も芸術家もおらないが、個性の強いサムライが沢山おります。

高橋弥太郎、道田重雄、村上光彦、杉山勇次、黒沢誠一、小林大二郎、奥山信吾、刈田好平、三浦三郎、大久保栄、加藤恭蔵、加藤周四郎、横谷永太郎、中山盛家、藤田光、相場圭太郎、斎藤一雄、竹村祐之助、長瀬直諒、加賀谷千代三郎、阿部光、村山多七郎、大内穂治君等々。

大内穂治幹事を中心に、二ヵ月に一回昭三会を開いているが、病気欠席以外はいつも二〇名前後の仲間が集り、盃を傾け、談論風発老いても意気盛んで、年令など感じないたのしい会合です。

十年前には共同で赤いベレー帽をかぶって還暦のお祝をしたり、一昨年は秋田中学卒業五〇周年記念として家内同伴の一泊旅行を道川の厚生年金センターで開催、参加者三〇名位、全員が三分間スピーチで秋中時代の思い出と現在の心境を語ったテープを全員に配ったのは大変良い記念になりました。今後会員不幸の場合はこのテープを弔辞代りにすることにしてあります。

同級生の動向が一番気になる年令になりました。

慶祝

◎勲三等旭日中綬章
佐藤久一氏（T15卒）
佐藤貞之助氏（T12卒）

◎勲四等瑞宝章
大野博通氏（T13卒）

◎黄綬褒章
斎藤鉱吉氏（S8卒）

◎藍綬褒章
加藤義孝（S16卒）

◎文部大臣教育者表彰受賞
吉井忠亮（S13卒）

◎秋田県文化功労章
高橋弥太郎（S3卒）

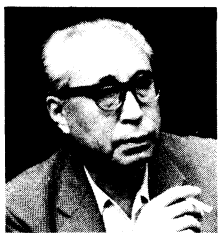
◎秋田県教育功労者表彰
桜谷吾朗（S12卒）

修学旅行吟

菅原　繁雄（昭13卒）
（昭23～43）

鴟尾映ゆる古都の秋空いと青し
落慶の日にめぐりあひたり古都の秋
（以上東大寺落慶法要）
秋深し唐招提寺に鳩群れる
奥の院きはめて秋の風涼し　（長谷寺）
秋雨にひときは映ゆる金閣寺

私が旧制秋田中学の最終学年だった昭和八年は、ちょうど秋中の創立六十周年の年だった。秋九月、全市を舞台にくりひろげたこのときの記念祭典が、なんといっても秋中時代の最大の思い出として残っている。式典は九月二日の朝、県記念会館南庭の大広場で、県が生んだ政界の大物、故町田忠治翁（民政党の党首）をはじめ多数の来賓を迎えて行われた。参会者は数千人を数える賑やかさで、それから数千人の職員、生徒が手に手に旗を振りながら東根小屋町の校舎を出発、市中の目抜き通りをねり歩いた。市内小学校のかわいい弟たちが千人ほど、続いた。夜はまた提灯行列となり、空にはどんどん花火が打ち揚げられて、壮観を呈した。月光は煌々として下界の賑わいを照し、私たちの最後の思い出の情景を一層印象深くさせたのだった。翌る年の昭和九年の春、学業を卒えると私は東京へ出たのだが、世はすでに非常時の風が吹き初めており、自分の生きるコースもしかとは見定められない時代になっていた。その意味では秋中時代までが、のびのびと生の息吹をほしいままにした時期だったといえるだろう。



二つの集会

小国敬三郎（昭9卒）

「尚久会」（昭九に通ずる）というのが、このとき学窓を出た人々の集まりで、いまでも年に一度は顔をそろえて盞を傾け、話に興ずるのをたのしみにしている。

「緑の美酒の酔深く、羅綾の衣の袖軽き…」あの愛唱した校友会歌が作られたのも、たしか六十周年の記念の一つであったが、作詞者の故古村精一郎先生のことは、あのころの秋中生なら誰でも知っている。山田耕作作曲の旋律を得て、この歌は全国有名校の寮歌に匹敵する格調をもつものといっていいだろう。古村先生は、名文名筆の名が高く、「不同」という名随筆集を遺されているが、先生の生前からその書名にちなんで「不同会」と名づけられた集いがある。秋中の卒業生だけで五十名ほどの月一度の会合だったが、先生の亡くなられたあとは年に一度となっていまも続き、十一月二十五日、その会を催したばかりである。このときはことしの文化の日に叙勲を受けた大野博道、佐藤貞之助の両会員と秋田県文化功労章を受章した高橋弥太郎氏のお祝いを兼ねて、なかなか秋中の意気、盛んであった。また十二月六日には斎藤鉱吉（黄綬褒章）、大守崇男（秋田市文化章）の両君の受章祝いをかねて、尚久会の総会が予定されている。

夢の中から

湊　潤二郎（昭23卒）
（昭48～55）

三日間で思い出を書けとの『だより編集部』からの命令である。夢と同じく、なぜか必然性も連続性もなく頭に浮かんで来る。整理する時間もないし、もう一度思い出せるかどうかもわからないので大事なことが後になるかも知れないが、書き始めよう。

昭和二十年五月、転校の手続きを、事務の『六ちゃ』に依頼してから三年生となる。二十三年十二月、五年生の半ばで転出するまでの、わずかな（とは言え、今の高校生と同じくらいの）期間が私の秋中生時代である。

手形の校舎での一と月ばかり、記憶にあるのは『ゆさん』の柔道の一時間と、三井先生の漢文の二時間、階段教室で何かをしたことだけである。

日石でのドラムかんころがしに続いて大野台での開墾、帰って来たのが終戦の日であった。机や椅子を運んで、将軍野の石油学校へ、牛島小学校の一年生の小さな椅子、ようやく駅前の連隊あとの旧兵舎に落ちつく。南京虫。

勉強らしい勉強が始まったが、私には英語のリーダー一冊があるだけでノートもない。いつも先生の顔ばかり見ていた。職員室では問題児扱いされていたことと思う。読書がにが手で、話しを聞く方が理解しやすいというのもこの頃身についたのだろうか。

授業のことを考えていたら、先生達の顔が浮かんで来て、あだ名も思い出してくる。

人間またはその部分として——最初の担任だったMティーチャーこと○○、ゲホ、ギャング、チャイナ、エノケン、坊ちゃん、君子、動物——ガメっこ、コロ、ヤギ、植物——カント豆、ゲタ、氏名を略したのでは、与太さん、杉忠、七、綱、

その他——オニっこ、スプリング、ジャイ、モンパ、ニューパイ、チンチャ、ソヤロ、ジープ。

後に校長になられて、私が仕えた三井、岡田両先生のあだ名をなぜか思い出せない。

創立百周年の年に私は母校に転任した。しかしこの時、あだ名を持った先生は、はたして何人居ただろう。テレビのあるスピード時代に、あだ名はもはやそぐわないものとなってしまったのか。人間関係も表面的な接触にとどまったのか、心淋しいものがあった。

私の秋中時代がキセルのラオのようなものであったにもかかわらず、学校をはじめ同窓会に温かく迎えられ、はげまし指導していただいたことを深く感謝し、たとえ、ほんのわずかなつながりであっても、大切にそだてて行きたいものと思っている。

母校同窓会のますますの発展を祈念してやまない。

会員の出版紹介

○松本源太良（大11卒）著
歌集『残照』
著者は秋田県歌人懇話会の代表理事である。大正末年から昭和三十年までの六百首を収めた第一歌集である。

○三浦三郎（昭10卒）著
『くすりの民俗学』
著者は山之内製薬㈱に勤務、昭和五十二年永眠。その遺稿を東京薬科大の川瀬清教授が編纂したものである。健友館発行。定価一六〇〇円。

○小貫山信夫（昭24～36）訳
ジョン・ミルトン
『楽園回復』
著者は同窓会特別会員。現在浦和高校教諭。ミルトンの叙事詩に「失楽園」「復楽園」があるが、この訳書は「復楽園」の新訳である。キリスト新聞社発行。定価一五〇〇円。

○西木正明著
『オホーツク諜報船』
著者の本名は鈴木正昭氏（昭34卒）。仙北郡西木村西明寺出身。角川書店発行。

哀悼

益戸　季春（大9卒）於秋田55・6
佐藤　久成明45卒）於南秋55・6
土崎　了恕（大7卒）於秋田55・7
小原　孟昭16卒）於座間55・7
中村常次郎（大13卒）於藤沢55・7
斎藤　義夫昭2卒）於由利55・7
加藤　忠三（大12卒）於由利55・8
山方　定二（大10卒）於秋田55・9
江畑　脩誠（大7卒）於秋田55・9
飯島　隆（大8卒）於東京55・
石井　雄光昭17卒）於秋田55・10
藝沼銀治郎（大8卒）於秋田55・10
竹内　雄（大8卒）於東京55・11
門間　秀夫昭4卒）於南秋55・11
船木　正昭28卒）於秋田55・11
笹尾　長（大5卒）於南秋55・11

●へんしゅうしつ●

○角館支部の小林定静氏、田口宗良氏、小林大蔵氏からも5口の広告をいただきましたが、紙面の都合で次号回しになりました。深くお詫びいたします。

○本号から百十周年記念事業実行委員会の中の広報委員会に二つの面を割愛することになり、第2面を提供いたしました。

○随想の村山氏はプレイタウン社長で評論家、小国氏は栄大楼のご主人で秋田市観光協会長、菅原氏は大館鳳鳴高校長、湊氏は秋田南高校勤務、いずれもご多忙の方々です。ありがとうございました。

大嶋民治（昭8）編集長のもと一関吉美（昭14）、山谷浩二（昭20）杉田　宏（昭21）、田口能祐（昭22）竹内一朔（昭24）、辻悌五郎（昭27）長野佳司（昭29）、今田　猛（昭31）植村久美（昭37）、根布谷豪（昭46）が編集に当たりました。

ポーラ化粧品鷹巣支店
九島正雪（S32卒）
鷹巣町栄町

内科・循環器科・小児科
奈良医院
奈良正人（S41卒）
鷹巣町大町二丁目（郵便局となり）
TEL〇一八六六—二一—一四六

株式会社佐々木電機
佐々木孝憲（S42卒）
鷹巣町駅前通り
TEL〇一八六六—三—〇三一一(代)

㈱ホテヤ建材店
布袋屋伊作（S20卒）
大館市片山町一丁目三ノ十
TEL〇一八六—四二—〇七一七

神林外科医院
児玉要（S29卒）
大館市水門前八三
TEL〇三六(四二)—九一三〇(医院)
四九—三六〇四(自宅)

一般製材・二分三厘板
納家商店製材所
納家政和（S37卒）
大館市清水二—二—一
TEL〇一八六—四二—一七五七

時計・宝石・メガネ
カトウ
加藤浩（S40卒）
大館市御成町二—五—八
TEL〇一八六—四二—〇七九三

佐藤歯科医院
佐藤正孝（S34卒）
鷹巣町松葉町四丁目
TEL〇一八六六—二—二七二七

昭和堂薬局
岩川徹（S42卒）
鷹巣町米代町四丁目
TEL〇一八六六—二—〇三五五(代)

同和鉱業株式会社
小坂鉱業所病院長
奥山廣（S15卒）

料亭北秋くらぶ
石川寛司（S25卒）
大館市幸町一五ノ六
TEL〇一八六—四二—二〇三三

株式会社伊徳
代表取締役社長
伊藤碩彦（S35卒）
大館市御成町一丁目十三の十
TEL〇一八六—四九—二二五五

伊藤治兵衛（S38卒）
大館市字谷地町一五番地
TEL〇一八六—四九—二二六八

寺内歯科医院
院長
寺岡洋一（S43卒）
大館市御成町三丁目六—五二
TEL〇一八六—四三—四三三四